

第4学年1組 総合的な学習の時間 「大好き！おみさか花広場」の実践から

おみさか花広場をより良い場所にしたい、多くの人に知ってもらいたいという思いをもって人、もの、ことに繰り返し関わることを通して、課題を自分事としてとらえて主体的に探究し、思いを深めていく子ども

1 はじめに

子どもが自己の生き方を考えるには、誰かの生き方に触れることが必要であると考えている。子どもたちが学びの対象に「恋する」には、それに恋している人と出会い、その熱量に感化されることが大切だと考えた。そこで、単元構想と同時進行で、子どもたちの「学びの伴走者」探しをした。ここでは、おみさか花広場（以下、花広場）の整備を行っている NPO 法人ストリートふくしま理事長の水口和栄さんと出会った子どもたちが、花広場に対する思いを深め、自分事として探究活動に取り組む姿について述べていく。

2 水口さんとの出会い～「水口さんは優しい人」～

2回目におみさか花広場を訪ねた後、子どもたちは「いったい誰がこんな人気のない場所にわざわざ広場を作ったのかな。」という問いをもった。そこで、「次回は、知っていそうな人がいたら聞いてみよう。」という目的をもって出かけることにした。

作業をしている水口さんを発見した春香と夏美が話しかけ、それをきっかけに花広場について話を聞く場面へと展開していった。水口さんには、子どもたちに今後の活動への意欲が高まるような語りかけをお願いしておいた。水口さんの言葉を受け止めた春香は、授業の中で水口さんの思いをみんなに伝え、ぜひ自分たちも花広場のために活動したいという気持ちを高めていた。春香の振り返りには、次のように書かれていた。



〈水口さんは優しい人だな〉

私が特に心に残った話は、花広場は昔は荒地だったということです。（中略）水口さんの、荒地をきれいにしたいという思いから花広場ができたそうです。お金も手間も大変だったらいいです。その話を聞いて、私は、水口さんは優しい人だな、と思いました。

この時の春香にとっては、花広場はまだ自分の外にある出来事であり、「水口さんは優しい人」という浅い印象である。

3 水口さんのように「強い思いをもって頑張っている人」の存在が大切と気づいた

10月のある日、今後の活動について話し合っていると、まずは3年生に伝えてみてはどうか、3年生なら行ってくれそうだ、という話になった。

C でも、3年生が行ったとしても、「え、ここが？」ってなるかも知れない。
T じゃあ、みんなはどうしてこんなに花広場に魅力を感じたのかな。
春香 それは、やっぱり水口さんがいたからでしょう。水口さんがいなかったら、こんなにやりたいとは思わなかったよ。水口さんの、花広場を広めたいっていう強い思いがあるから、私たちもやりたいってなった。
T だとしたら、3年生にとっては、君たちが水口さんの立場になるっていうことかな。
C 4年生が、強い思いをもって花広場を広めようと頑張っていることが3年生に伝わればいいんじゃないかな。

子どもたちは、誰かの強い思いが物事を押し進める原動力になることに気付いた。春香にとって水口さんは、「優しい人」から「強い思いをもって頑張っている人」へと変わっていった。

4 繰り返ししかかわることで自分事になっていく

子どもたちがやりたいことを教師が後押しして、水口さんと共に花広場を育てていく、そんなイメージで単元づくりをしてきた。

春香は、水口さんに「花を植えさせてほしい。」と相談するとともに、花広場に出向いて自分たちが立てた計画に基づいて活動してきた。その活動も、一回きりではなく、「活動する→振り返りをする→次の活動計画を立てて実行する」というサイクルを3回繰り返した。課題に直面すると、解決のために資料を使って調査活動をしたり、市役所に電話をしてお願いをしたりするなど、子どもたちは主体的に動き始めた。花広場という対象に繰り返し関わることで、思いを深めながら主体的に探究活動を進めるようになっていった。

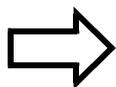


〈水口さんに相談したい〉



1回目の活動

植える花の種類や場所を水口さんに相談した。



3回目の活動

みんなに協力を呼び掛けて200個の球根を植える。

〈どこに植えたらいいかな〉

〈みんなにも協力してほしい〉

5 「私たちの花広場に対する愛は、伝わりましたか。」

11月の土曜日に、7人の子どもたちがが市主催の「花植えボランティア」のイベントに参加して、PR活動を行うことになった。学級でイベントのチラシを配付した際に、「このイベントに来る人は、花が好きな人だろうから、花広場にも興味をもってくれるに違いない。」という思いから実現した活動である。

当日、百名近い参加者の前でスピーチをした春香は、締めくくりにかこう問いかけた。



〈愛は伝わりましたか〉

春香 **私たちの花広場に対する愛は、伝わりましたか。**

この言葉からは、単に情報を伝えるだけではなく自分たちの熱意もしっかりと伝えたいという強い思いが感じられた。繰り返ししかかわる中で、春香にとって花広場は自分事となっていったことが分かる。

6 「私たちは、花広場に惚れ込んだのです。」

12月には、市内の7か所に分かれて本格的なPR活動を行うことになった。「福島第四小学校の人なら、信夫山に近いから行ってくれるかもしれない。」そう考えた春香を含む5人の子どもたちは、第四小学校に出向いてPR活動を行った。プレゼンテーションアプリを用いて写真や資料を提示しながら、花広場について紹介した。

春香 **花広場に出会った私たちは、もう、とにかく花広場に惚れ込んだのです。**



〈惚れ込んだのです〉

その締めくくり、「花広場に出会った私たちは、もう、とにかく花広場に惚れ込んだのです。」と語った春香。学びの対象に「恋をする」姿が具現したと感じた瞬間であった。

7 おわりに

子どもたちは、花広場をみんなに知ってもらうためにはどうしたらよいか考え、自分たちに出来ることを実行してきた。その際に、「水口さん」という、熱意をもって花広場の開拓と整備を行っている人物と深く関わりながら探究活動に取り組んだことにより、誰かの熱い思いが物事を進める原動力になることに気付いていった。そして、PR活動で自分たちが伝えたいのは、花広場の単なる「情報」ではなくて「自分たちの熱い思いである」ということを確認した。「学びの伴走者」と共に、繰り返し対象に関わることにより、ひとみ輝く子どもの姿が具現できたと考える。